

『淮南萬畢術』拾遺（一）

有馬 卓也

【凡例】

一、本『淮南萬畢術』拾遺は、葉德輝本『淮南萬畢術』（本誌34頁40号に訳注（一〜七）を掲載）に収録されていない逸文を収集したものである。

一、典籍ごとに123の順に『淮南萬畢術』との関わりを示した上で、葉德輝本に収録されていない条文を「1」「2」「3」の順に示す。それぞれ【原文】【書き下し】【注】【現代語訳】【補】の順に提示した。

一、各典籍のはじめに既に葉德輝本に収められているものを提示することがある。その場合は葉德輝本の通し番号を提示した。

一、『淮南萬畢術』と書名が明記されているものの外に、『淮南子』『劉安方』『淮南方』『淮南子畢方』『淮南術』等の書名のものにも目配りした。

一、書名を明記していない書物の場合でも、『淮南萬畢術』のものと推定される同系統の文は挙げた。同系統と判断したものは、各条ごとにその根拠を【補】において示した。

一、原則として、『淮南萬畢術』の文章である可能性があれば、多少根拠が薄くても入れることにした。

1 『博物志』

類書等に『博物志』からの引用は数多いが、もともとこの書名自体が付けられやすい名称であるから、それらの引用をすべて『隋書』經籍志に見える晋の張華の『博物志』からのものとみなすのには躊躇する。ただし、『博物志』には『淮南萬畢術』に関連する記述が多く見え、さらに葉德輝はこれらに全く注目していない。

もともと『博物志』には劉安に関する記述もあり、劉安が登仙したとする巻五の一九二（テキストとして范寧の集本である『博物志校証』（明文書局、1982）を使用した。）には

漢の淮南王、謀反して誅せらる。亦云ふ、道を得て輕舉す、と。とあり、巻五の一九五には『漢書』劉向伝と同質の

又（『典論』）云ふ、王仲統云ふ、甘始・左元放・東郭延年は、容成の婦人を御するの法を行ひて、並びに丞相の録する所と為る。

間ま其の術を行ひ、亦其の験を得。降りて道士劉景に就きて雲母九子元の方を受く。年三百歳。之きて在る所なし。武帝、恒に此の薬を御し、亦験ありと云ふ。劉徳、淮南王の獄を治め、『枕中鴻宝秘書』を得。子向に及び成めて之を奇とす。黄白の術の成るべきを信じ、神仙の道致すべしと謂ふも、卒に亦験なし。乃ち以て罪に罹る。

といった記述が見られる。
また葉徳輝本に収録されたもので、『博物志』にも見えるものが七条あり、以下の通りである。(最初の(一)で括った番号は葉徳輝本の通し番号。以下は『博物志』の文章。)

(九六) 削木令圓、舉以向日、以艾於後成其影、則得火。(冰(范寧の校証に従つて木を冰に改めた)を削りて円ならしめ、挙げて以て日に向ひ、艾を以て後に於て其の影を承(范寧の校証に従つて成を承に改めた)くれば、則ち火を得。)(卷四・一七二)

(二一) 蜥蜴或名蝮蜓。以器養之、以朱砂、體盡赤。所食滿七斤、治擣萬杵。點女人支體、終年不滅。唯房室事則滅。故號守宮。傳云「東方朔語漢武帝、試之有驗。」(蜥蜴、或は名を蝮蜓。器を以て之を養ふに、朱砂を以てすれば、体尽く赤たり。食ふ所七斤に満つれば、治め擣くこと萬杵。女人の支体に点すれば、終年滅せず。唯だ房室の事あれば則ち滅す。故に守宮と号す。『伝』に云ふ「東方朔、漢の武帝に語り、之を試みるに験あり」(卷四・一七六)

○『淮南萬畢術』にはかなり早い段階で注がついていたことは拙稿『淮南萬畢術』研究序説(本誌40巻)において言及した。

ここで注目したいのは、末尾の「伝曰」の部分である。本条は『太平御覽』三一・九四六、『玉燭宝典』二月、『歳時広記』二・三七、『医心方』二六にも引かれているが、『博物志』が引く「東方朔云々」は、ここにしか見られない。この東方朔が多彩な知識をもつて武帝の問いに答えるというスタイルは、『漢武帝別国洞冥記』に代表される魏晋南北朝に製作されたと考えられる一連の著作に発現している。

(八九) 取鼈控令如碁子大、擣赤菟汁和合、厚以茅苞、五六日中作、投地中。經旬鬱鬱盡成鼈也。(鼈を取りて控きて碁子の如き大きさとし、赤菟を擣きし汁もて和合し、厚くして茅を以て苞み、五六日中に作り、地中に投ず。旬を経れば鬱鬱尽く鼈と成るなり。)(卷四・一七七)

(七) 月布在戸、婦人留連。註謂「以月布埋戸限下。婦女入戸、則自淹留不去。」(月布 戸に在れば、婦人留連す。註に謂ふ「月布を以て戸限の下に埋む。婦女の戸より入れば、則ち自ら淹留して去らず」と。)(佚文・二〇二)(褚人穫『堅瓠集(広集)』一)
○ここに見える注は葉徳輝本が示す『歳時広記』二七の「婦人の月事を取りて、七月七日に焼きて灰と為し、楣の上に置かば、則ち復た去らず。婦人をして知らしむること勿れ」とは異なる。以下の二条は同系統の情報伝えるものとして提示してある。
(一〇九) 江陵有猛人。能化爲虎。俗又曰虎化爲人。好著紫葛人、足無踵。(江陵に猛人あり。能く化して虎と為る。俗に又虎の化して人と為ると曰ふ。好みて紫葛を著けし人にして、足に踵なし。)(卷二・七二)

（八六）齊桓公出、因與管仲故道。燉煌西渡流沙往外國、濟沙千餘里。中無水。時有伏流處、人不能知。皆乘駱駝。駱駝知水脈。

過其處、輒停不肯行。以足蹋地。人於所蹋處掘之、輒得水。（齊の桓公出で、管仲と故道に因る。燉煌より西して流沙を涉り外國に往く。沙石千余里。中に水なし。時に則ち沃流の處あるも、人は知るあたはず。皆駱駝に乗る。駱駝は水脈を知り、其の處に遇へば輒ち停まりて肯て行かず。足を以て地を蹋む。其の蹋みし處に於て之を掘れば、輒ち水を得。）（卷八・二八六）

では、以下四条の『淮南萬畢術』と近似する内容を持つものを提示する。

示す。

【1】

【原文】

桃根爲印、可以召鬼。

【書き下し】

桃根もて印を為れば、以て鬼を召すべし。

【現代語訳】

桃の木の根で印を作れば、鬼を呼び出すことができる。

【補】

○ 佚文・二〇二『本草綱目』三八。

○ 博物系、仙術系。

○ 印が百神を役するといふ話が『録異伝』に見える。参考として引いておく。「会稽山陰賀瑀、字彦琚。曾得疾。不知人、惟心下尚温。居三日乃蘇。云「吏将上天。見官府。府君居处甚敞。使人将

瑀入曲房。房中有層架。其上有印及劍。使瑀取之。及雖意所好、短不及上層。取劍以出。問之。「子何得也。」瑀曰「得劍。」吏曰「恨不得印。可以驅策百神。今得劍。惟使社公耳。」疾既愈。每行、即社公拜謁道下。瑀深惡之。」（『太平広記』卷三八三所収『録異

伝』

【2】

【原文】

駝屎焼烟殺蚊虱。

【書き下し】

駝の尿の焼きし烟は蚊虱を殺す。

【現代語訳】

駱駝の糞を焼く時に出る煙は、蚊や虱を殺す。

【補】

○ 佚文・二〇六『本草綱目』五〇。

○ 生活の知恵系

【3】

【原文】

以狗肝和土泥竈、令婦女孝順。

【書き下し】

狗の肝を以て土と和し竈に泥せば、婦女をして孝順ならしむ。

【現代語訳】

犬の肝臓を土と混ぜて竈にぬれば、女性を親孝行にさせ従順にさせ

る。

【補】

○ 佚文・二〇七『本草綱目』五〇。ただし『本草綱目』は張華『物類志』として引いている。

○ 心を操作する呪術系。

○ 『淮南萬畢術』では、犬や竈が関わる心を操作する呪術の例が三つ見える。(三九)は犬の尾と馬の毛を使ったもの、(六)(七九)は竈に関わるものである。

[4]

【原文】

取婦人月水布、裹蝦蟇、於厠前一尺入地埋之、令婦不妬。

【書き下し】

婦人の月水布を取りて、蝦蟇①を裹み、厠の前一尺に於て地に入れて之を埋むれば、婦をして妬せざらしむ。

【注】

① 蟾は蟆と同じ。蝦蟇はガマガエルのこと。

【現代語訳】

経血が付着した布を準備して、これでガマガエルをつつんで、厠の一尺前の地面に埋めておくと、女性に嫉妬心をおこさせない。

【補】

○ 佚文・二〇九『本草綱目』五二。

○ 月布を用いた心を操作する呪術系である。『淮南萬畢術』では(七)に月布の用例が見え、ここでは女性を家から出ていかなくさせる

とする。また(九七)では天門冬を薬材として女性に嫉妬心を起こらなくさせるといふ呪術が示されている。

2 『神異経』

前漢武帝期の東方朔の作とされるが、六朝期の齊・梁の頃の偽作である。ただし六朝期は『隋書』経籍志に見える『淮南萬畢経』と『淮南變化術』が存在していた時期であるから、本書に見える引用は重視せねばならない。

[1]

【原文】

淮南子術曰、餌丹陽之爲金。

【書き下し】

『淮南子術』に「丹陽①の金と爲るを餌す」と曰ふ。

【注】

① ここでは丹(水銀と硫黄とを化合した赤色の鉱物)の一種をさすか。

【現代語訳】

『淮南子術』に「金となった丹陽を服食する」と言う。

【補】

○ 『神異経』西南荒経

○ 仙薬系。

○ 『淮南子術』からの引用文は、記述形式から推して『淮南萬畢術』のそれに近い。しかし内容的には魏晉南北朝期の道教に顕著であ

る鍊金術を示している。参考として前文には「西方日宮之外有山焉、其長十余里、広二三里、高百余丈、皆大黃之金。其色殊美、不雜土石、不生草木、上有金人、高五丈余、皆純金、名曰金犀。入山下一丈有銀、又入一丈有錫、又入一丈有鉛、又入一丈有丹陽銅、似金可鍛、以作錯塗之器也。」とある。この『淮南子術』が『淮南萬畢術』と何らかの関連を持つものであったとすれば、魏晉南北朝期においても尚加筆されていた可能性もある。

3 『齊民要術』

本書は北魏の賈思勰撰による農書であり、数多くの逸文を収める。

『齊民要術』が引く『淮南萬畢術』は五条あり、そのうち二条は葉德輝本も引いている（ただし葉德輝自身は『齊民要術』からは引いていない）。以下の二条である。（一）で括った番号以下は、ここでは『淮南萬畢術』の文章。）

（四五）狐目狸腦、鼠去其穴。（注）以塗鼠穴即去。（狐目・狸腦は鼠を其の穴より去らしむ。（注）以て鼠の穴に塗れば即ち去る。）

（『齊民要術』一。『芸文類聚』九五。『太平御覽』九一一。）

（五二）酒薄復厚、漬以莞蒲。（注）斷蒲漬酒中、有頃出之、即酒厚也。（酒の薄きを復厚くせんとすれば、漬くるに莞蒲を以てす。

〔注〕蒲を断ち酒中に漬け、頃ありて之を出せば、即ち酒厚し。（『齊民要術』一〇。『太平御覽』九九九。）

以下、『齊民要術』が『淮南萬畢術』として引くものを四条（うち一条は『淮南萬畢術』の（四五）と重複するが、『齊民要術』の記述は注が

完備されているので提示する）、『淮南術』として引くものを一条、『術』として引くものを九条提示する。ここで『術』九条を引くのは、これらが『萬畢術』『淮南術』の略である可能性があるだけでなく、その伝える内容が『淮南萬畢術』に近似しているということによる。もともと『淮南萬畢術』自体が、当時民間に広く知られていた「術」の集積であったと推定される。ちなみに『齊民要術』が引く『淮南子』（全七条）は、いずれも現行本に見えるものである。

なお、『齊民要術』については、テキストとして四庫全書本を使用した。また西山武一・熊代幸雄訳『校訂訳註 齊民要術（三版）』（アジア経済出版会、1976）を参照した。

〔1〕

【原文】

淮南萬畢術曰、燒穰殺瓢。物自然也。

【書き下し】

『淮南萬畢術』に曰く「穰を焼けば瓢を殺らす（①）。物の自ずから然るなり」と。

【注】

① 枯に同じ。

【現代語訳】

『淮南萬畢術』に「ワラを焼いた時に出る煙は瓢を枯らす」と言う。

【補】

○ 『齊民要術』卷二（第一五瓢）。

○ 生活の知恵系。「物自然也」は注の可能性もある。

○(一)では「穰を焼けば」と読んで穰を焼いた時に出る煙の意味で解した(『博物誌』の「2」と同質のもの判断した)が、「焼きし穰は」と読んで穰を焼いた時に出る灰の意味で解することも可能である。

[2]

【原文】

淮南萬畢術曰、狐目狸腦、鼠去其穴。(注曰、取狐兩目・狸腦大如狐目三枚、擣之三千杵。塗鼠穴則鼠去矣。)

【書き下し】

『淮南萬畢術』に曰く「狐目狸腦は、鼠其の穴を去る」と。(注に曰く「狐の兩目・狸の腦の大きき狐の目の如きもの三枚を取りて、之を擣くこと三千杵。鼠の穴に塗れば則ち鼠去る」と。)

【現代語訳】

『淮南萬畢術』に「狐の目と狸の腦は、鼠を巢穴から去らせる」とある。(注に「狐の兩目と狸の腦の狐の目ほどの大きさのものを三つ準備して、これを三千回臼づく。それを鼠の巢穴に塗ると、鼠は去っていなくなる」とある。)

【補】

○『齊民要術』卷五(第四五桑・柘)。

○呪術系。『淮南萬畢術』(四五)。

○注が『藝文類聚』九五や『太平御覽』九一一が引く注「以て鼠の穴に塗れば即ち去る。(以塗鼠穴即去。)」の前に「取狐兩目・狸腦大如狐目三枚、擣之三千杵。」が加わっており、「以」に接続する形になっている。

[3]

【原文】

淮南萬畢術曰、麻鹽豚豕。(取麻子三升、擣千余杵。煮爲羹、以鹽一升著中、和以三斛飼豕、則肥也。)

【書き下し】

『淮南萬畢術』に曰く「麻・塩は豚豕を肥やす。(麻子三升を取りて、擣くこと千余杵。煮て羹と爲し、塩一升を以て中に著け、和するに三斛を以てして豕を飼へば、則ち肥ゆるなり。)

【現代語訳】

『淮南萬畢術』に「麻と塩は豚をふとらせる」と言う。(麻の実三升を準備して、千数回臼づく。それを煮てスープとし、塩一升を加えて、豚の飼料三斛にそのスープを和えて豚を飼えば、豚はふとる。)

【補】

○『齊民要術』卷六(第五七羊)。

○生活の知恵系。

○末尾の「和以三斛」の部分が、何を麻塩に三斛和するのか、或は何に麻塩を三斛和するのが判然としない。多分、通常の豚の飼料であろうが、それでも前者(飼料+麻塩三斛)と後者(飼料三斛+麻塩)の違いは大きい。とりあえず一回に与える飼料の量は決まっているであろうと判断して、前者(飼料に麻塩のスープ三斛を加える)として解釈しておいた。

[4]

【原文】

淮南萬畢術曰、結桂用葱。

【書き下し】

『淮南萬畢術』に曰く「桂を結ぶ①に葱を用てす」と。

【注】

① 『楚辞』九歌・大司命に「桂枝を結びて延佇すれども……」とあり、同じく山鬼に「辛夷の車に桂の旗を結ぶ」とあるが、本条と関わりがあるかどうかは不詳。

【現代語訳】

『淮南萬畢術』に「桂を結ぶ際にはネギを用いる」と言う。

【補】

○ 『斉民要術』卷一〇（桂）。

○ 博物系。

○ 桂・葱は香木香草であるから、呪術的影響力を更に強めるものか。

【5】

【原文】

淮南術曰、從冬至日數、至來年正月朔日、五十日者民食足、不滿五十日者減一斗、有餘日、日益一斗。

【書き下し】

『淮南術』に曰く、冬至より日数へて來年正月朔日に至るまで、五十日なれば民食足り、五十日に満たざれば一斗を減ず。余日あらば、日に一斗を益す。

【現代語訳】

『淮南術』に「冬至の日から数えて翌年の一月一日までの日数が五

十日あれば、人民の食料は足りる。五十日に及ばなければ、一斗足りない。五十一日以上であれば、余剰日数の一日につき一斗分だけ余る」と言う。

【補】

○ 『斉民要術』卷一（第二收穫）。

○ 占断系。本条は曆に関する天文占であるから、或は淮南の九師説を著した『淮南道訓』（『漢書』藝文志・六芸略・易）の流れを汲むもの可能性もある。

【6】

【原文】

術曰、東方種桃九根、宜子孫除凶禍。明桃奈桃亦同。

【書き下し】

術に曰く「東方に桃九根を種うれば、宜しく子孫凶禍を除くべし。

明桃①・奈桃も亦同じ。

【注】

① 西山・熊沢は金沢本では「胡桃」に作るとする。ここでは「明桃」のままにしておく。

【現代語訳】

術に「家の東側に桃を九株植えれば、子孫に災いが及ばない。明桃・奈桃でも（効果は）同様である」と言う。

【補】

○ 『斉民要術』卷四（第三四奈桃）。

○ 呪術系。

○ [6][9][11]の三条が「東方・桃」「北方・楡」「西方・楸」という形でセットになっている。この組み合わせに関して『御定佩文斎広群芳譜』は西方(巻七五)と北方(巻七四)を、『畿輔通志』は北方(巻五六)を、いずれも出典を『典術』として引いている。また関連するものとして『農政全書』に「玄扈先生曰」として「南方種大小麥、最忌。」(巻二六)、「南方種蕪菁、収子多。」(巻二八)を引くが、これらと同列に於ていいかどうかは疑問である。

[7]

【原文】

術曰、井上宜種茱萸。茱萸葉落井中、有此水者、無瘟病。

【書き下し】

術に曰く「井の上に宜しく茱萸①を種うべし。茱萸の葉の井中に落ちて、此の水あらば、瘟病②なし」と。

【注】

① カワハジカミ。

② 急性の伝染病の総称。

【現代語訳】

術に「井戸のそばにカワハジカミを植えるのがよい。カワハジカミの葉が井戸の中に落ち、その水(を常飲すること)があれば、急性の伝染病にかかることがない」と言う。

【補】

○ 『斉民要術』巻四(第四四茱萸)。

○ 薬物系。

[8]

【原文】

又術曰、懸茱萸子於屋内、鬼畏不入也。

【書き下し】

又術に曰く「茱萸の子を屋内に懸くれば、鬼畏れて入らざるなり」と。

【現代語訳】

また術に「カワハジカミの実を家の中に懸けておけば、鬼がそれを恐れて入ってこない」と言う。

【補】

○ 『斉民要術』巻四(第四四茱萸)。

○ 呪術系。

[9]

【原文】

術曰、北方種楡九根、宜蠶桑田穀好。

【書き下し】

術に曰く「北方に楡九根を種うれば、宜しく蠶桑・田穀に好かるべし」と。

【現代語訳】

術に「(家の)北側に楡を九株植えれば、蠶用の桑や田の稲によい」と言う。

【補】

○ 『斉民要術』巻五(第四六楡・白楊)。

○ 呪術系。

〔10〕

【原文】

術曰、正月旦、取楊柳枝、著戸上、百鬼不入家。

【書き下し】

術に曰く「正月の旦、楊柳の枝を取り、戸の上に著くれば、百鬼家に入らず」と。

【現代語訳】

術に「正月の早朝、楊柳の枝をとって、それを戸口の上に着けておけば、すべての鬼が家に侵入してこなくなる」と言う。

【補】

○ 『斉民要術』巻五（第五〇槐・柳・楸・梓・梧・柞）。

○ 呪術系。

〔11〕

【原文】

術曰、西方種楸九根、延年百病除。

【書き下し】

術に曰く「西方に楸〔①〕九根を種うれば、延年し百病除かる」と。

【注】

① ヒサギ。キササギ。

【現代語訳】

術に「（家の）西側にヒサギを九株植えれば、寿命が延び、さらにあ

らゆる病気にかからない」と言う。

【補】

○ 『斉民要術』巻五（第五〇槐・柳・楸・梓・梧・柞）。

○ 呪術系。

〔12〕

【原文】

術曰、埋牛蹄著宅四角、令大富。

【書き下し】

術に曰く「牛蹄を埋めて宅の四角に著くれば、大いに富ましむ」と。

【現代語訳】

術に「牛の蹄を家の四隅に埋めておけば、大いに富む」と言う。

【補】

○ 『斉民要術』巻六（第五六牛・馬・驢・騾）。

○ 呪術系。家の四隅に何かを埋めて何らかの効果を期待する術は『淮南萬畢術』の（五）に「埋石四隅、家無鬼。（注）埋圓石於四隅、雜桃弧七枚、則無鬼殃之害。非獨今也。」という形で見える。埋める物も効果も異なるが、同系統の呪術と考えてよからう。

〔13〕

【原文】

術曰、懸羊蹄著戸上、辟盜賊。澤中放六畜、不用令他入、無事。横截群中、過道上行、即不諱。

【書き下し】

術に曰く「羊蹄①」を懸けて戸の上に著くれば、盜賊を辟く。澤中に六畜②を放つに、用て他をして入らしめざれば、事なし。群中を横截する③あるも、道上を過ぎて行けば、即ち諱まず」と。

【注】

① タデ科のギシギシをさすこともあるが、『齊民要術』が羊の項目で本条を引いており、さらに『本草綱目』の羊蹄（ギシギシ）の項目に本条に対応する記述もないので、ひとまず羊の蹄で解しておく。ただし、羊蹄という名称から考えれば、どちらでもよいという解釈（ギシギシで代用しても可）も可能であろう。

② 馬・牛・羊・豚・犬・鶏の六種の家畜。

③ 横断に同じ。

【現代語訳】

術に「羊の蹄を戸口の上に懸けておけば、盜賊の侵入を避けることができる。沢に六畜を放牧する時に、その他の動物が入らないようにすれば、事故は起らない。六畜の群れの中を他の動物が横断することがあっても、六畜が道の上を移動していれば、さしさわりはない」と言う。

【補】

○ 『齊民要術』卷六（第五七羊）。

○ 『医心方』卷三〇羊蹄が『萬畢方』を引いて「盡を療す（萬畢方云療盡）」と言う。ここでは「羊蹄」をギシギシの意で引いているものと思われる。

○ 前半（「群盜賊」まで）と後半とに分けて考えるべきであろう。後半はさらに「無事」までとそれ以下の二段にわけられよう。後

半は明らかに動物（必ずしも羊に限定されない）に関する記述であるが、前半の「羊蹄」とギシギシとするか羊の蹄とするか判然としない。また、後半の二段目は状況がつかみづらい。特に「道上」の主語が「六畜」なのか「群中を横截する」ものなのか判然としない。ここでは、「群中を横截する」ものを家畜を狙う動物と考え、それが道上を行くのは考え難いことから、六畜が道上を移動するとして解釈しておいた。

〔14〕

【原文】

術曰、若爲妊娠婦人壞醬者、取白葉棘子著甕中、則還好。（俗人用孝杖攪醬及炙甕醬。雖回而胎損。）乞人醬時、以新汲水一盞、和而與之、令醬不壞。

【書き下し】

術に曰く「若し妊娠せし婦人に醬①を壊さるれば②、白葉の棘子③を取りて甕中に著くれば、則ち還好し。（俗人は孝杖④を用いて醬を攪し、甕醬を炙るに及ぶ。回すと雖も胎損はる。）人に醬を乞はれし時は、新たに汲みし水一盞⑤を以て、和して之に与ふれば、醬をして壊さざらしむ」と。

【注】

① 醬は様々な材料（米・麦・豆等）から作られる。ここではそれらを一括して醬と呼んでいるものと思われる。

② 醬が醎酵食品であることから、この「壊」は醎酵の失敗（醎酵させすぎ等）をさすものと思われる。

③ 西山・熊沢に従って棘柴とし、サネブとナツメの柴としておくが、再考の余地あり。

④ 未詳。西山・熊沢は「老人の用いる杖か」とする。また「孝子杖。喪礼中に用いる杖」とする説を引く。

⑤ 蓋は杯のこと。さかずき一杯分の水。

【現代語訳】

術に「もし妊婦が醬を悪くしてしまつたら、白い葉のいばらを準備して、それを醬の入ったカメの中に入れれば、またもとにもどる。

（俗人は孝杖を使って醬をかきまわし、カメを炙る。醬はもとにもどるが、妊婦の胎児が損なわれてしまう）人から醬を求められた時は、新しく汲んだ水を一杯分だけ醬にまぜて与えると醬が悪くならない」と言う。

【補】

○ 『齊民要術』卷八（第七〇作醬法）。

○ 生活の知恵系。

4 『開元占経』

本書は唐の瞿曇悉達撰で、当時の暦及び占に関する書を網羅する。全一二〇巻のうち一一〇巻までが天文占、それ以降が植物や動物などによる占いを占めず、『淮南萬畢術』と関わると思われるものは主に末尾一〇巻部分である。

『開元占経』に見られる『淮南萬畢術』からの引用は四条あり、いずれも葉德輝本に収められている。これらはすべて卷一二〇（龍

魚虫蛇占）の蛇占に属しており、以下の通りである。

（一〇四・注）「君室無故見蛇、君且去。蛇無故在林下上、君非其子。

（君室に故なくして蛇を見れば、君且に去らんとす。蛇故なくして牀上に在れば、君其の子を非る。）」（蛇入都邑宮廟）

（二〇五・注）「君失春政、則着蛇見於邑、即歲多禍。君失夏政、則

赤蛇見、君失秋政、則白蛇見、君失冬政、則黒蛇見。（君春政を失へば、則ち着蛇 邑に見はれ、即ち歳に禍多し。君夏政を失へば、則ち赤蛇見はれ、君秋政を失へば、則ち白蛇見はれ、

君冬政を失へば、則ち黒蛇見はる。）」（五色蛇）

（二二・文）「為死事、則蛇鳴君室。（死事を為さんとすれば、則ち蛇 君室に鳴く。）」（蛇入都邑宮廟）

（二二・注）「蛇無故闘于君室、後必争立。小死小不勝、大死大不勝、小大皆死、皆不立也。（蛇の故なくして君室に闘へば、後必ず争ひ立つ。小死せば小勝たず、大死せば大勝たず、小大皆に死せば皆に立たざるなり。）」（蛇入都邑宮廟）

拙稿『淮南萬畢術』研究序説」でも言及したが、葉德輝が（二二）の（文）と（注）に配列した二条は『開元占経』では別個のものとしており、葉德輝が両者を接合させた上で（二二）の文と注としたことについては再考の余地がある。

ここで取り上げたいのは『開元占経』に見える計一九条の『淮南子』からの引用である。この一九条の引用の内、四条は現行本『淮南子』には見られない文章であり、『淮南萬畢術』の可能性なしと断言することはできない。というのも、下の「2」に示した『開元占経』卷一一六の「屋置狐穴、狐不敢復居。」は、『太平御覽』の七三六（方

術部・術)、八九〇(獸部・犀)、九〇九(獸部・狐)ではすべて『淮南萬畢術』の文として提示されているからにほかならない。以下、その四条を提示する。なおテキストは四庫全書本を使用した。

〔1〕

【原文】

淮南子曰、君失其行、日薄蝕無光。

【書き下し】

『淮南子』曰く、「君其の行を失へば、日薄蝕①して光なし」と。

【注】

① 太陽や月が出ていながら、その光が薄い現象をいう。凶兆の一つとされる。

【現代語訳】

『淮南子』に「君主がそのあるべき行為を失したならば、太陽がその光を失う」と言う。

【補】

○ 『開元占経』九。

○ 予兆系(凶兆)。

〔2〕

【原文】

淮南子云、犀置狐穴、狐不敢復居。

【書き下し】

『淮南子』云ふ「犀狐穴に置けば、狐敢て復居らず」と。

【注】

【現代語訳】

『淮南子』に「犀(の角)を狐の巢穴に置けば、狐はもう二度とそこにいつかない」と言う。

【補】

○ 『開元占経』一一六。

○ 生活の知恵系。『淮南萬畢術』(四二)に同じ。

〔3〕

【原文】

淮南子曰、狐九尾者、九配得其所、子孫繁息、明後当旺也。

【書き下し】

『淮南子』曰く「狐の九尾あれば、九配①其の所を得、子孫繁息し、明後に当に旺さかんなるべきなり」と。

【注】

① ここでは夫婦、つれあいの意か。

【現代語訳】

『淮南子』に「九尾の狐が現れば、九組の男女がつれあいを得、子孫に恵まれ、後年繁栄するだろう」と言う。

【補】

○ 『開元占経』一一六。

○ 予兆系(吉兆)。

【4】

【原文】

淮南子曰、政惡生孽蟲食心。

【書き下し】

『淮南子』曰く「政悪なれば孽①を生じて虫心②を食ふ」と。

【注】

① 災い、不吉のこと。

② 植物の芯。ここでは穀物と考えるべきであろう。

【現代語訳】

『淮南子』に「政治が悪い状態にあれば、不吉が発生し、虫が穀物の芯を食う」と言う。

【補】

○ 『開元占経』一一〇。

○ 予兆系（凶兆）。

○ 『漢書』五行志（下の上）に「京房易傳曰、臣安祿茲謂貪、厥災蟲、蟲食根。徳無常茲謂煩、蟲食葉。不紕無徳、蟲食本。與東作争、茲謂不時、蟲食節。蔽惡生孽、蟲食心。」とある。

○ 『開元占経』の引き間違いの可能性もないとは言えないが、『開元占経』が引く『淮南子』と『漢書』五行志が引く『京房易伝』との記述が一致するのは、共通する思想からの引用の可能性もある。京房易が『斉民要術』の【5】でも指摘した淮南易学グループの流れを汲んでいた可能性もある。この問題については稿を改めて論じたい。

5 『異術』『異術』

『異術』『異術』ともに葉徳輝が『萬畢術』の誤記として判断したものが集本の中に収められている。『異術』は『隋書』経籍志（子・医方）に見え、宋の建平王劉宏撰。一一〇卷。一方、『異術』についての詳細は不明である。主立った類書でも『異術』を引くのは『芸文類聚』のみで、あとは四庫全書本の『太平御覧』九三二に「淮南萬異術」として引かれるぐらいである（『北堂書鈔』『初学記』『白孔六帖』『開元占経』には引かれない）。誤植の世界に存在する書物の可能性もある。

葉徳輝本では（一一一）が『異術』、（一一二）から（一一六）までが『典術』からの引用となっている。『萬畢』として引用されたのは以下の六条である。

（一一一）朮草者、山之精也。結陰陽之精氣。服之令人絶穀致神仙。

（朮草は山の精なり。陰陽の精氣を結ぶ。之を服せば人をして穀を絶ちて神仙に致さしむ。）（『藝文類聚』八十二）

（一一二）桑木者箕星之精。神木。蟲食之爲文章、人食之老翁爲小童。（桑木は箕星の精。神木なり。虫之を食へば文章を爲し、人之を食へば老翁も小童と爲る。）（『芸文類聚』八十八）

（一一三）桃者五木之精也。故壓伏邪氣制百鬼。故今人作桃符著門上、壓邪氣。此仙木也。（桃は五木の精なり。故に邪氣を圧伏し百鬼を制す。故に今人は桃符を作りて門上に著け、邪氣を圧す。此れ仙木なり。）（『芸文類聚』八十六）

（一一四）杏者東方歳星之精也。（杏は東方歳星の精なり。）（『芸文類聚』八十七）

(一一五) 女貞木者少陰之精也。冬葉不落。(女貞木は少陰の精なり。冬に葉落ちず。)(『芸文類聚』八十九)

(一一六) 餌桃膠十五日後、夜半時視北斗魁、内當有神人。見可飲玉漿。(桃膠を餌すること十五日後、夜半時に北斗魁を視れば、内に當に神人あるべし。見れば玉漿を飲むべし。)(『北堂書鈔』百四十四、『太平御覽』八百六十一)

しかし、類書には葉德輝本に示されたもの以外にも『典術』からの引用が多くあり、葉德輝もそれは見ていたはずである。葉德輝が数多い『典術』からの引用の中から、どういう基準で上記の五条を『萬畢術』の誤記と認定したのかが不明である。以下、葉德輝が引かなかつた『典術』(本稿では『太平御覽』に引かれたものに限定し、それ以外のものは次回以降に送る)の文の中で、『萬畢』と判断しても可能なものをあげていく。なお、テキストは四庫全書本を使用した。

〔1〕

【原文】

典術曰、服食天門冬、治瘰除百病。

【書き下し】

『典術』曰く「天門冬(①)を服食せば、瘰(②)を治し百病を除く」と。

【注】

- ① クサスギカツラ。
- ② 首にできるこぶ。

【現代語訳】

『典術』に「クサスギカツラを服用すれば、首にできたコブが治り、すべての病気を防ぐ」と言う。

【補】

○ 『太平御覽』七四〇(疾病部・瘰)。

○ 藥物系(医学)。天門冬は『淮南萬畢術』の(九七)(九八)に薬材として見え、女性に嫉妬心を起こさせなくする(九七)、酒に酔わなくさせる(九八)といった効能の記述がある。

〔2〕

【原文】

王建平典術曰、雲母有五名。其色青黒、五色亂文者、名曰雲母。白而微者、名曰雲英。如水露黄白、名雲沙。青白赤雜者、名曰雲珠。黄白而赤重厚、名陽起石。雲母根也。其中黒文斑如錢、名雲臈。傷人。不可服。第一磷石、第二雲母、第三雲珠、第四雲英、五雲光。服磷石壽五千、服雲母壽三百年、服雲英千年、服雲光天地同保。

【書き下し】

王建平『典術』曰く「雲母に五名あり。其の色の青黒にして、五色の乱文(①)なる者は、名づけて雲母と曰ふ。白くして微なる者は、名づけて雲英と曰ふ。水露の如く黄白なるものは、雲沙と名づく。青白赤雜なる者は名づけて雲珠と曰ふ。黄白にして赤く重厚なるものは、陽起石と名づく。雲母の根なり。其の中に黒文の斑の錢の如きものは、雲臈と名づく。人を傷つく。服すべからず。第一は磷石、第二は雲母、第三は雲珠、第四は雲英、五は雲光。磷石を服せば寿五千、雲母を服せば寿三百年、雲英を服せば千年、雲光を服せば天

地と保を同じくす」と。

【注】

① ここでは五色の鉱石が雑然と混じっている状態をさす。

【現代語訳】

王建平の『典術』に「雲母には五つの名がある。青黒色に五色がちりばめられているものを雲母という。白くて微小なものを雲英という。水滴のようで黄白色のものを雲沙という。青白赤が混じっているものを雲珠という。黄白色で赤みがあり、ズシリと重いものを陽起石という。雲母の根である。その中にある黒い銭状の斑点が雲膾である。これは人を傷つけるので服用してはならない。以上、第一が磷石、第二が雲母、第三が雲珠、第四が雲英、第五が雲光である。磷石を服用すれば寿命が五千年となり、雲母を服用すれば寿命が三百年となり、雲英を服用すれば千年となり、雲光を服用すれば天地下その命を等しくする」と言う。

【補】

○ 『太平御覧』八〇八（珍宝部・雲母）。

○ 薬物系。仙薬の材料となる雲母の博物的記述と、その効能の記述からなる。

○ 『本草綱目』卷八雲母の条が引く『抱朴子（佚文）』と内容が近似する。「葛洪『抱朴子』云、雲母有五種而人不能別。当举向日看之。陰地不見雜色也。五色並具而多青者、名雲英。宜春服之。五色並具而多赤者、名雲珠。宜夏服之。五色並具而多白者、名雲液。宜秋服之。五色並具而多赤者、名雲母。宜冬服之。但有青黄二者、名雲砂。宜季夏服之。晶晶純白者、名磷石。四時可服也。古方服

五雲甚多。然脩鍊節度、恐非文字可詳。不可輕餌也。」

【3】

【原文】

典術曰、天地之寶、藏於中極。名曰雌黄。千年化為雄黄。雄黄千年化為黄金。

【書き下し】

『典術』曰く「天地の宝は、中極①に蔵せらる。名づけて雌黄②と曰ふ。千年にして化して雄黄③と為る。雄黄は千年にして化して黄金と為る」と。

【注】

① 中極は天地人のそれぞれに設定される（天は北極星、人はへその下など）。ここでは地の中極をさすか。

② 硫黄と砒素の混合鉱物。

③ 砒素の硫化鉱物。『本草綱目』九・雄黄が引く独孤滔『丹房鑑源』に「雄黄は千年にして黄金と為る」とある。

【現代語訳】

『典術』に「天地の宝は、中極にたくわえられている。その名を雌黄という。千年たつと変化して雄黄となる。雄黄は千年たつと黄金に化す」と言う。

【補】

○ 『太平御覧』九八八（薬部・雌黄）。

○ 仙薬の材料となる雌黄・雄黄に関する博物系。

[4]

【原文】

典術曰、茯苓者、松脂入地千歲爲茯苓。望松樹赤者下有之。

【書き下し】

『典術』曰く「茯苓①は、松脂の地に入りて千歳にして茯苓と爲る。松樹の赤き者の下を望めば之あり」と。

【注】

① 松の根に寄生するきのこのマツホド。

【現代語訳】

『典術』に「茯苓は、松ヤニが地中に入つて千年たったものである。赤い松の木の下を見れば、これがある」と言う。

【補】

○ 『太平御覽』九八九（薬部・茯苓）。

○ 薬材として使用頻度の高い茯苓に関する博物系。（七三）に身を軽くして気力を益し、白髪を黒くし、落ちた歯を再生させ、目を再び見えるようにし、長寿をもたらす薬の材料として見える。

[5]

【原文】

典術曰、五味者五行之精。其子有五味。淮南公羨門子、服五味十六年、入水不濡、入火不燄、日行萬里。

【書き下し】

『典術』曰く「五味①は五行の精。其の子②に五味あり。淮南公羨門子③は五味を服すること十六年にして、水に入りて濡れ

ず、火に入りて燄げず、日に萬里を行く」と。

【注】

① 甘・酸・塩・辛・苦の五つの味。それぞれ土・木・水・金・火に対応する。

② 五味子。モクレン科のチョウセンゴミシ。五味をすべて備えているのでこの名がある。

③ 羨門子は伝説上の仙人の名。安期生と並称されることが多く、『史記』始皇本紀・封禪書、『漢書』郊祀志などにその名が見える。

【現代語訳】

『典術』に「五味は五行の精である。その子が五味である。淮南公の羨門子は五味を十六年服用したことによって、水に入つても濡れず、火に入つても火傷をせず、一日に一万里を行くことができた」と言う。

【補】

○ 『太平御覽』九九〇（薬部・五味）。

○ 仙薬系。

○ 『太平御覽』九九〇・薬部・五味が引く『抱朴子（佚文）』に「抱朴子曰、羨門子服五味十六年、始降玉女、能入水火。」及び『本草綱目』一八上・五味子が引く『抱朴子（佚文）』に「抱朴子云、五味者五行之精。其子有五味。淮南公羨門子、服之十六年、面色如玉女、入水不濡、入火不灼。」と見える。

[6]

【原文】

典術曰、食澤瀉、身輕日行五百里、走水上。可遊無窮致玉女神仙。

【書き下し】

『典術』に曰く「澤瀉〔①〕を食へば身軽くして日に五百里を行き、水上を走る。無窮〔②〕に遊び玉女神仙を致すべし」と。

【注】

① 水草のサジオモダカ。塊茎を澤瀉という。

② 「遊無窮」は『莊子』逍遙遊篇に見える。

【現代語訳】

『典術』に「サジオモダカを食せば、身が軽くなって一日に五百里行き、水上を走ることができるようになる。そして無窮の地に遊び、玉女や仙人を招き寄せることができるようになる」と言う。

【補】

○ 『太平御覧』九九〇（粟部・澤瀉）。『本草綱目』一九（澤瀉）。なお『本草綱目』が引く『典術』には「可遊無窮致玉女神仙」の九字がなく、「一名澤芝」の四字が入る。

○ 『本草綱目』卷一九（澤瀉）は『仙経』を引いて「服食断穀皆用之」「身軽能歩行水」と言う。

○ 仙薬系。

【7】

【原文】

典術曰、壽榮草出少室金山丘下。服之令人不老。取葉服之、可通百神。

【書き下し】

『典術』曰く「壽榮草〔①〕は少室金山〔②〕の丘下に出づ。之を服せば人をして老いざらしむ。葉を取り之を服せば、百神に通ずべし」と。

【注】

① 未詳。壽榮草はこの文書の中でしか出てこない。

② 嵩山の西峰を少室山という。東峰が太室山。少室山には三六峰があるという。金山はその一つか。

【現代語訳】

『典術』に「壽榮草は少室山の金山の丘の下に生える。これを服用すれば人を不老にする。その葉を服用すれば、すべての神に通じることができると言う。」

【補】

○ 『太平御覧』九九四（百草部・草）。

○ 仙薬系。

【8】

【原文】

又曰、餌玉長生草、一名通天。価値千万。陰乾方寸七日甫服。令人得仙。

【書き下し】

又『典術』曰く「餌玉長生草〔①〕、一名通天。価値は千万。陰乾して方寸七〔②〕を日甫に服す。人をして仙を得しむ」と。

【注】

① 未詳。『太平御覧』九九四は「餌玉」に作るが、『天中記』五三

・『記纂淵海』九四・『淵鑑類函』四一などにより、「餌玉」に改めた。「独活」(『本草綱目』一三)の別名を「長生草」と言うが、本「餌玉長生草」との関連は認められない。

② 一辺が一寸の四辺形の計量器で、容量は約27ml。

【現代語訳】

又(『典術』に)「餌玉長生草、一名を通天という。陰乾して(粉末にしたものを)方寸ヒだけ夕暮れ時に服用する。人を仙人にすることができると言う。

【補】

○ 『太平御覧』九九四(百草部・草)。

○ 仙薬系

[9]

【原文】

典術曰、聖王仁功濟天下者堯也。天降精於庭爲韭。感百陰之氣爲菖蒲。

【書き下し】

『典術』曰く「聖王の仁功の天下に濟る者は堯なり。天の精を庭に降して韭と爲る。百陰の氣(①)を感じて菖蒲と爲る」と。

【注】

① ここでは多くの陰気ほどの意味か。

【現代語訳】

『典術』に「聖王の中でその仁や功績が天下に行き渡った者は堯である。(だから)天が精を庭に降してニラを生じさせた。また、それ

は多くの陰の気を感じとって菖蒲となった」と言う。

【補】

○ 『太平御覧』九九九(百草部・菖蒲)。

○ 博物系。

(付記) 本研究は科学研究費助成事業(基盤研究(C) 課題番号15K02033)による成果の一部である。